

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

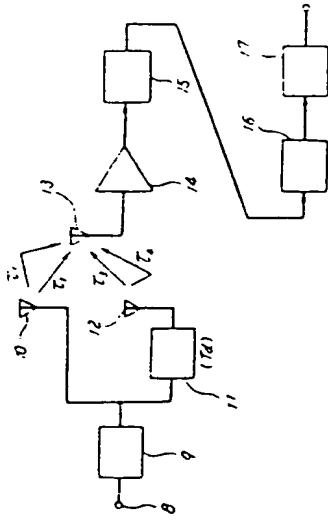
**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.**

(54) TRANSMISSION PATH DIVERSITY TRANSMISSION SYSTEM

(11) 63-286027 (A) (43) 22.11.1988 (19) JP
(21) Appl. No. 62-120130 (22) 19.5.1987
(71) NIPPON TELEGR & TELEPH CORP <NTT> (72) HIROSHI SUZUKI(1)
(51) Int. Cl. H04B7/06, H04L1/00

PURPOSE: To prevent the transmission band width from being made broader than the signal band by radiating a modulation wave from the 1st transmission antenna, radiating a delayed wave retarding the modulation wave by one time slot or over from the 2nd transmission antenna and providing a multi-path processing unit extracting a main wave component included in a received wave to the receiver side.

CONSTITUTION: A transmission code series is inputted to a modulator 9, the modulation output is radiated directly from a transmission antenna 10, converted into a delay modulation wave retarded by one time slot or over (T_d) by a delay circuit 11 and radiated from a transmission antenna 12. A signal wave received by a reception antenna 13 is the synthesis of the signal from the transmission antenna 10 and the signal from the transmission antenna 12, and the transmission antennas 10, 12 are located with a proper distance so that the correlation between both the waves is nearly 0 at the receiving point. The received synthesis wave is amplified by a receiver 14, detected by a detector 15 and the main wave is emphasized and extracted by a waveform equalizer 16 as a multi-path processing unit and the component other than the main wave is cancelled.



⑪ 公開特許公報 (A)

昭63-286027

⑤Int.Cl.⁴H 04 B 7/06
H 04 L 1/00

識別記号

府内整理番号

④公開 昭和63年(1988)11月22日

7251-5K
8732-5K

審査請求 未請求 発明の数 1 (全5頁)

②発明の名称 送信バスダイバーシチ伝送方式

②特願 昭62-120130

②出願 昭62(1987)5月19日

| | |
|-----------------|--|
| ③発明者 鈴木 博 | 神奈川県横須賀市武1丁目2356番地 日本電信電話株式会社通信網第二研究所内 |
| ③発明者 上田 隆 | 神奈川県横須賀市武1丁目2356番地 日本電信電話株式会社通信網第二研究所内 |
| ④出願人 日本電信電話株式会社 | 東京都千代田区内幸町1丁目1番6号 |
| ④代理人 弁理士 本間 崇 | |

明細書

1. 発明の名称

送信バスダイバーシチ伝送方式

2. 特許請求の範囲

送信側において、変調波を第1の送信アンテナから放射するとともに、該変調波を1タイムスロット以上遅延させた遅延波を第2の送信アンテナから放射し、受信側に受信波に含まれる主波成分を強調・抽出するマルチバス処理装置を有することを特徴とする送信バスダイバーシチ伝送方式。

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は、フェーシングによる伝送特性の劣化が著しい無線通信の改善に関するものである。

〔従来の技術〕

無線伝送系の無線区間には、一般に複数の伝送路が形成されており、マルチバス伝送系として扱うことができる。

このような系でディジタル伝送を行なう場合

の方式の該略は第1図のようになる。

第1図において、まず、ある符号系列が入力端子1から変調器2へ入力される。変調器出力は送信点3から空間へ放射される。放射波は伝播時間が τ_1 と τ_2 の2つのバスを通して受信点4に到達する。受信点4における合成波は受信機5で増幅され検波器6で検波される。検波器6の出力は判定器7で識別され、入力と同一符号系列が再生される。

このような伝送系において、 τ_1 と τ_2 の伝播時間の差、 $\Delta\tau = |\tau_2 - \tau_1|$ が変調されるディジタル信号の1タイムスロット以下であると合成波が互いに干渉し合い受信レベルが大きく変動する。

第1図では、2波の合成を示したが、一般の伝送路では3波以上の干渉も頻繁に発生し、多重波として扱われている。この多重波を合成したものでも2波と同様に大きなレベル変動が発生する。変動のようすを第2図に示す。このようなレベル変動の下ではレベルが大きく低下し

たときに伝送誤りがバースト的に多数発生し、伝送特性が劣化する。

〔発明が解決しようとする問題点〕

上述のような伝送特性の劣化を抑えるために、従来、ダイバーシチ方式が検討されてきた。

例えば、受信側に2つのアンテナを設け、受信レベルの高いアンテナ出力をもとに復調すると伝送誤りが大幅に改善される。

しかし、この方法では受信側の構成として2つのアンテナを必要とする。そのため、受信側を簡単な構成にする必要がある携帯通信等では通用が難しいという欠点があった。

もう一つの方法として、送信側に2つのアンテナを場所的に離して設置し、各アンテナには中心周波数だけを意図的にオフセットさせた同一の変調波を送出する送信ダイバーシチ方式が知られている。

この方法は、2つの信号がタイミング・クロック周期で同期状態にあるときには、お互いに直交信号となることを利用しており、検波出力

は、2波のレベルで重み付けされた各波の検波波形の合成となる。そのため、レベルの高い信号が検波特性を支配するので伝送特性が改善される。

しかしながら、この方法では、直交信号を形成するために伝送帯域として約2倍の帯域を必要とするという欠点があった。

本発明は、このような送信帯域が信号の帯域より広くなる欠点を解決した送信ダイバーシチを提供することを目的としている。

〔問題点を解決するための手段〕

本発明によれば、上述の目的は前記特許請求の範囲に記載した手段により達成される。

すなわち、本発明は、ダイバーシチ伝送系を以下のように形成するものである。

- (i) 変調波を第1の送信アンテナから送出する。
- (ii) これを変調ディジタル信号の1タイムスロット以上遅延させた遅延変調波を第2の送信アンテナから送出する。
- (iii) 受信側ではマルチバス電波伝搬路を伝搬する間

に複数の波に分散した信号をアンテナ1つで受信する。

(iv) 受信側には波形等化器などのマルチバス受信装置を設置し、受信波に含まれる複数波のうち最もレベルの高い主波成分を強調・抽出する。

そして、本発明は従来の技術とは以下の点で相違がある。

- (i) 送信側において、直接変調波の他に、これを1タイムスロット以上遅延させた遅延変調波を発生させ、それを第2の送信アンテナから送出している。従来の送信ダイバーシチでは、第2の送信アンテナから送出する直交信号は、変調波の中心周波数を同程度にオフセットさせたり、変調波の帯域をほぼ2倍に広げたりして得ていたので、実質的な帯域幅がほぼ2倍に広がっている。本発明ではこのような送信信号帯域の広がりは起きない。
- (ii) 受信側においては、1本のアンテナで受信したのち、波形等化器などのマルチバス

処理装置を用いて主波成分を強調・抽出している。従来の送信ダイバーシチ方式とは、マルチバス処理装置がダイバーシチ効果を得るための本質的な役割を担っていることが異なっている。

〔実施例〕

本発明の実施例を第3図に示す。

同図において、まず送信符号系列が入力端子8から、変調器9へ入力され、その変調出力は送信アンテナ10から直接放射される。同時に、該変調出力は、遅延回路11により1タイムスロット以上(T_d)遅延させた遅延変調波に変換され、送信アンテナ12から放射される。

これらの信号波は、受信アンテナ13で受信される。受信された信号波は送信アンテナ10からのものと、送信アンテナ12からのものの合成であるが、これら両波の間の相関が受信点ではほとんどになるように送信アンテナ10と、送信アンテナ12を適当に離して配置する。受信された合成波は自動利得調整(AGC)回路

付きの受信機 14 で増幅される。受信波は送信アンテナ 10 からの信号と送信アンテナ 12 からの T_d だけ遅延させられた信号との合成であるが、各成分は、すでに説明したように多重波であるから、そのレベルは大きく変動する。そこで、どちらか大きな方を主波成分とする。

増幅された信号は、検波器 15 で検波される。検波された波形は主波のみであれば、変調波一波を正常に検波した波形となるが、主波以外の成分が無視できないレベルとなる一般の場合には、検波した波形は大きく歪んでいる。

このように波形歪がある受信波から正常な検波波形を得るために、受信系にマルチバス処理装置が用いられる。

本実施例では、マルチバス処理装置として波形等化器 16 を用いている。この装置では主波を用いて、主波以外の成分を打ち消している。このような波形等化器出力は、歪が大幅に抑制されているので、判別器 17 により正常な識別、すなわちデータ再生ができる。

アンテナ 10 からの t_1 と t_2 の遅延波の合成波と、アンテナ 12 からの t_1 と t_2 の遅延波の合成波は、互いに独立なレーレーフェーリング波となる。

このように変動している 2 つの合成波を重畠したものから、波形等化器により、どちらか大きい方の合成波が抽出される。したがって、第 3 図の受信系はレーレーフェーリング波から 1 波を選択する 4 ブランチ選択ダイバーシチ系となる。

ただし、2 つの合成波のレベルが変動し、レベル差が逆転するときには抽出成分が他方へ切り替わるので、タイミング・クロックが遅延量 T_d だけ前後する。この瞬間、従来の波形等化器をそのまま用いると波形等化処理の不安定および復調データの不連続が発生するので、これらに対する処置を同時に行なう必要がある。

次に、伝送レート $1/T$ が高速の場合には、 T が小さくなるため $|t_1 - t_2|$ と $|t_1 - t_2|/T$ が T とほぼ同じか、それ以上になる場合

この実施例では、変調波を遅延させているが、変調波をハードウェア的に遅延させることが難しい場合には、第 4 図のように入力端子 18 からの送信入力信号の一方をあらかじめ遅延回路 19 により遅延させ、変調器を 20 と 21 で示したように 2 つ用いて、それぞれの出力を送信電力増幅器 22 と 23 により増幅して、送信アンテナ 24 と 25 から送出することにより容易に遅延波を得ることができる。

上述した伝送系における伝送特性を詳しく説明する。

第 3 図に示すように、送信アンテナ 10 からの多重波が 2 波からなり t_1 と t_2 の伝搬時間を要し、送信アンテナ 12 からの多重波も 2 波からなり t_1 と t_2 の伝搬時間を要したとする。伝搬時間差 $|t_1 - t_2|$ と $|t_1 - t_2|/T$ が T_d に比べて十分に小さく各波の平均レベルがほぼ等しい場合にはキャリアの位相がランダムに変動し、互いに強めあったり打ち消し合ったりするので大きくレベルが変動し、送信アンテ

ナ 10 からの t_1 と t_2 の遅延波の合成波と、アンテナ 12 からの t_1 と t_2 の遅延波の合成波は、互いに独立なレーレーフェーリング波となる。

したがって、4 ブランチ選択ダイバーシチ効果を有する。このようにして選択される各成分が、より遅延差の小さな多重波から形成されているときは、各成分はレーレーフェーリングの分布と同じになる。

しかし、各成分がこれ以上分解できない 1 波とみなせる場合には、それらの成分のレベル分布は対数正規分布となることが多い、その変動はレーレーフェーリングより変動のダイナミックレンジが小さく、かつ変動の速さも穢やかである。このような場合には、波形等化の処理が容易になるだけでなくダイバーシチ効果も大きくなる。

ただし、この 4 ブランチ効果は、 $|t_1 - t_2|$ 、 $|t_1 - t_2|/T$ が T より大きくなることが必要であるが、この遅延差は電波伝播路の状況に応じて変化し、確率的な現象である。

したがって、送信側におけるTdの遅延を行なわない場合には1プランチないし4プランチの間でプランチ数が確率的に変動し、伝送特性はあまり安定ではない。

しかしながら本発明のように、送信側でTdの遅延を行なっている場合には2プランチないし4プランチの間で変動し、伝送特性の安定性が増す。この劣化をさらに抑えるために、送信側での遅延量が異なる遅延波の数をさらに増加する方法も考えられる。この場合には、さらに精度のよい波形等化器を必要とするので、その性能に対するコストを考えて遅延波の数を考える必要がある。

以上、マルチバス処理装置として、波形等化器を例に上げて説明したが、各成分の遅延量を観測し、その遅延量を調整して各波を合成し、相対的に主波成分以外を抑制する方法(RAKE)などが知られており、それらに対しても上述した送信バスケイバーシチ方式は有効に作用する。

容易である。

従って、移動通信や放送の分野において、小形で携帯に適した、伝送特性の良好な、受信機を容易に実現できる利点がある。

4. 図面の簡単な説明

第1図は従来の無線伝送系を示す図、第2図はフェージング時の受信点におけるレベル変動を示す図、第3図は本発明の一実施例を示す図、第4図は本発明の他の実施例を示す図である。

- 1 …… 入力端子、 2 …… 变調器、
- 3 …… 送信点、 4 …… 受信点、 5
- … 受信機、 6 …… 検波器、 7 …
- … 判定器、 8 …… 入力端子、 9
- … 变調器、 10, 12 …… 送信アンテナ、 11 …… 遅延回路、 13 …
- 受信アンテナ、 14 …… 受信機、 15
- … 検波器、 16 …… 波形等化器、
- 17 …… 判定器、 18 …… 入力端子、
- 19 …… 遅延回路、 20, 21 ……
- 变調器、 22, 23 …… 送信電力増幅

またマルチバス処理装置の処理方法によっては、等レベルの二波から一波を抽出するのは、極端に処理精度を必要としたり、アルゴリズムの収束に時間を要したりする場合がある。

このような場合については、遅延波発生回路に重み付け回路を付与し2波の比率を変える方法が考えられる。

なお、各アンテナからの受信波の相関の値が0に近いほど、すなわち無相関のときほど、上述したダイバーシチ効果が大きくなるが、現実の伝送系では、相関係数が0.7程度まで増加しても同様の効果が期待できる。

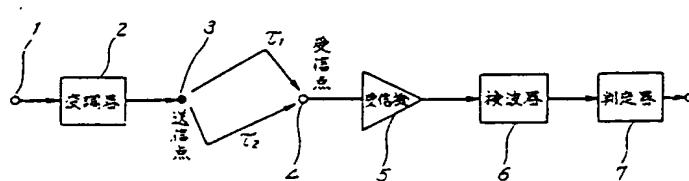
〔発明の効果〕

以上説明したように、本発明は実質的な信号伝送帯域幅を広げない送信ダイバーシチであるから、周波数利用効率の高い伝送系を実現できる。

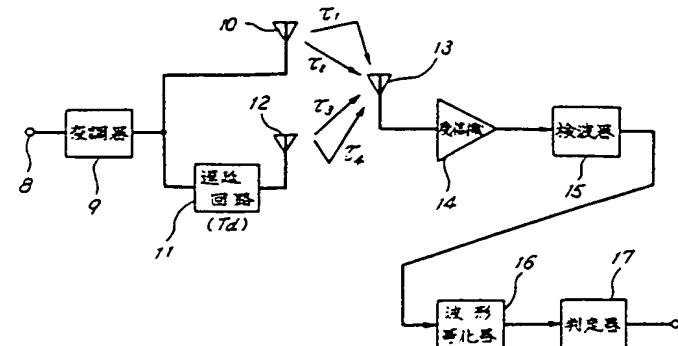
また、受信側は1本のアンテナでダイバーシチ効果が得られ、マルチバス処理装置は容易にIC化ができるので、受信機の小形・簡易化が

器、 24, 25 …… 送信アンテナ

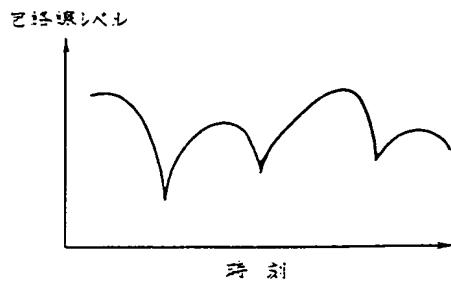
代理人弁理士 本間崇



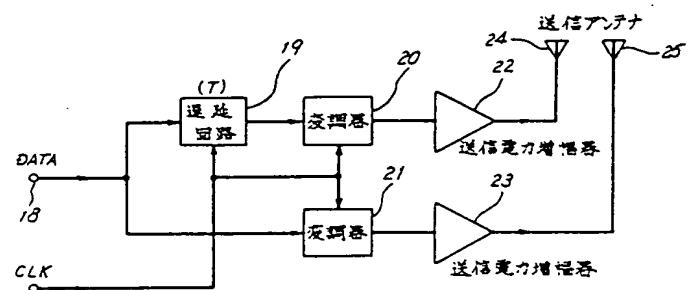
第1図



第3図



第2図



第4図